

東北アジア学術交流懇話会ニューズレター

うしとら

第6号

● 目次 ●

論点：ジェネレーション・ギャップについて.....	1
萬華鏡：ロシアの中の日本文学.....	2
Area Report [SIGNAL]：「ロシア」・「モンゴル」・「中国」・「朝鮮地域」.....	3
日本館便り.....	4
東アジア伝統文化の伝承相を比較する.....	5
最近の講演会.....	6
センター動向.....	7
客員教授紹介.....	7
東北大学とモンゴルとの学術交流について.....	8



論点

ジェネレーション・ギャップについて

東北大学東北アジア研究センター客員教授／経団連特別顧問／元駐ロシア大使

渡邊 幸治



先日、旧知の新聞記者と話していて、少なからず衝撃を受けたことがある。モスクワで一緒だった彼は、私より多分ふた周り若い筈だが、その彼が驚いたことには、夏期大学で講義をして語り合った学生達にとっては、ベルリンの壁の崩壊も、湾岸戦争もかれらの記憶としては残っていないとのことだ。

常に、年寄りと思われたくないと思ってきた小生も齢66歳となると、そうもいかないということで、講演の席では、終戦後のひもじい思い、60年の安保騒動、70年代のオイルショック、サイゴン陥落、さらには、83年のアキノ暗殺事件などは、年長者の経験として触れることにしている。しかし、東西冷戦の終結、イラクのクウェイト侵攻といった、ついこの間起きた——と私には思える——大事件を思い出して持っていない世代が既に存在しているという事実はショックである。

そうすると、こういった新しい世代にとって、あの戦争——湾岸戦争でなく第二次世界大戦——というのは、一体何だったということになっているのだろうか。東アジアの永続的な安定にとって、いわゆる歴史認識の問題は日本として避けて通れないと考える私にとって、これは極めて深刻な問題のように思える。端的に言って、憲法問題について、制定後半世紀をすぎ、第9条の問題を含めて、広く国民の間で見直しのための議論をすべき時期に来ていると私も考え出しているが、歴史の反省なくして憲法改正を論ずることには強い躊躇と不安を感じる。

しかし、“戦争”も冷戦も知らない新しい若者の世代でも、自

分の国のあり方として過去の不幸な歴史をより客観的に捉え、それを繰り返してはならないといった、基本的な認識は広く共有しているとの見方もあり得るだろう。私自身は、80年代初めに北京の大使館に勤務していたときに、いわゆる教科書問題が提起され、被害者の記憶は加害者の記憶より遙かに根強く残るものだと痛感した。

ところで、ジェネレーション・ギャップの問題は、こういった歴史の問題だけではなく、もっと身近の問題でもあるようである。

先の新聞記者の友人がいうには、新入の記者の中には、高度成長の時代を知らず、停滞と低迷の日本経済が常態だと感じている連中もいるとのこと。90年代は日本にとって失われた十年だったと残念がり、何とか経済の安定成長軌道を取り戻せないかと願い、それは日本国民全体のコンセンサスだと私どもが勝手に思いこんでいること自体が滑稽な間違いかも知れないということだ。停滞と低迷の時代以外知らない若者が増えていること自体、景気回復を難しくしているのかも知れない。 昨年の出生率が1.34と過去最低を更新したとの新聞記事を読んで、この若者の世代の問題と何か関係しているような気がする。

以上を読み返してみても、これはまさに老世代の科白であり、老いの証拠であり、若者にはとても賛成も理解も出来ない論点かもしれないと自省するが、こういったことを含めて、東北大学では東北アジア研究センターに関係させてもらっている関係もあり、学生諸君とおおいに話し合ってみよう。

萬華鏡

ロシアの中の日本文学

東北アジア研究センター客員教授・
ロシア科学アカデミー世界文学研究所首席研究員 キム・レチュン

今日ロシアの知識人たちの教養において、日本文学はもう欠くことのできない存在である。紫式部、松尾芭蕉、石川啄木、芥川龍之介、川端康成その他多くの日本人作家の作品が翻訳され、その発行部数は数千万部にのぼる。ロシア全土の図書館で日本の小説が読まれるようになり、俳人松尾芭蕉は個人の書斎を飾っている。日本文学・文化がロシア人の日常生活の中に入ってゆく。20世紀の初めに西洋文化が普通の日本人の日常生活とつながっていったように。

東西両大陸にまたがっているロシアは、地政学的立場から見ればユーラシア大国である。その歴史はアジアと深い関連を持っているばかりでなく、文学・哲学には東洋的要素が多分に含まれている。ロシア文学がアジア諸国の読者に深い親近感を呼び起こすのは偶然ではない。同時に東洋文化に対するロシア人の関心はもともと強い。

日本文学がロシアで読まれ始めたのは、それほど遠い昔ではなかった。確かに20世紀の初めまでは、日本文学はロシアの読者にとって辺境の文学であった。1907年、徳富蘆花の小説『不如帰』がフランス語から重訳され、『私は生きたくない』というタイトルで出版された。この小説は文学作品として読まれたというよりは、遠い東の国で起きた「珍奇な」家庭事件が異国情緒を誘うエキゾチックな読み物として受け入れられた。

20～30年代には、谷崎潤一郎の『痴人の愛』とか、有島武郎の『その女』、プロレタリア作家たちの作品が紹介されたが、日本文学の「発見」には至らなかった。日本の小説は限られた専門家たちの域に留まっていた。

ロシアの広範な読者層が日本文学に強い興味と関心に向け始めたのは、戦後の60年代後半からであった。

当時、ソ連の読書界における阿部公房のデビューは見事だった。知的文学を求めていた多くの読者たちは、『砂の女』



芭蕉像の横に立つ筆者
(岩手・平泉の中尊寺にて)

をむさぼり読んだ。実存主義文学の傑作として高く評価された日本「戦後派」の作品集は数多く出版された。野間宏、堀田善衛、大江健三郎その他多くの作家の作品が広く読まれた。

60～70年代に、旧ソ連科学アカデミーは9巻より成る『全世界文学史』の編纂を始めたが、それに先だって

200巻の『全世界文学全集』を刊行した。編集の方針において、ヨーロッパ中心主義的立場が徹底的に否定された。全集には東洋の古典が大きな位置を占めている。

日本文学は『伊勢物語』から始まり『源氏物語』、近松門左衛門の戯曲、芭蕉の詩篇、その他多くの古典的作品が世界文学の遺産として含まれている。20世紀の世界文学シリーズには、東北アジアの作家のうちただ二人——芥川龍之介と魯迅の選集が別巻になって出版された。

東洋に対するロシア読者の関心は、主に東洋の古典に向けられているというのが一つの特徴であろう。20世紀の東洋文学を西洋の「模倣」と見る傾向は西欧の見方と同じであるように思われる。川端康成は、日本古典の伝統を背負う作家としてロシアの読者に迎えられ、川端文学と現代世界文学との関わりについては、顧みられることがほとんどなかった。川端は日本の古典の美の世界の輪郭から外に出ない作家として受け取られた。全集の20世紀世界文学シリーズには川端の名は見えない。

もちろん、川端の文学は日本の美と伝統を基底にしており、それがロシアの読者に喜び迎えられた。しかし、現代に生きる日本の美は、狭い民族的な枠内に留まることはない。その時、文学は衰退する。伝統と現代の総合が日本文学の根本的課題であった時代に生きた川端康成は、20世紀の文学的実験に対して敏感であった。世界文学をコンテキストにして川端の創作を再考しようとする考え方が強くなっている。

多種多様な流れが大洋をなして現代日本文学を形成する。川端康成と大江健三郎のノーベル賞受賞記念講演は対照的であった。川端は「美しい日本の私」を創作の根源とし、大江は「あいまいな日本」の探求を志向する。そして二人の日本作家は、東・西に広く読まれている。

ここで私は野口米次郎の論文「世界における日本文学の地位」を思い出す。「私ども日本人が文芸上に世界的地位を要求する場合には、日本人特有のものを提供しなければ駄目である。言い換えれば、中国とか西洋の影響以前の日本文学の産物、少なくともその影響の薄いもので世界的地位を争わなければならない。」

この論文が書かれたのは1932年、近代日本文学はまだ50年を越えていない時代だった。世界における現代日本文学の価値を云々するには時期尚早であった。

大江健三郎にノーベル文学賞が授与されたことは、20世紀の世界文学発展のプロセスと密接につながり合って発達した現代日本文学の高さが、世界に認められたことを意味するものであろう。

AREA REPORT

SIGNAL

ロシアから 2000年の日露関係

エリツィン大統領の辞任演説から始まった今年の日露関係は、これまでとは違う雰囲気の中で迎えられた。いうまでもなく、「2000年までに平和条約を締結する」という両国首脳の合意が果たされるのかどうか、多くの疑問と一縷の望みが入り交じりながら、各界から注目されているからである。当センターの主催によるものを含め、「エリツィン時代の終わり」（東京：法政大学）、「エリツィン後のロシア：日露関係の展望」（仙台：東北アジア研究センター）、「日露新時代」（札幌：毎日新聞社）など、ロシア側の要人を迎えた国際シンポジウムが各地で行われている。興味深いのは、「両国史上、今ほど良好

な関係はない」（パノフ駐日大使）ときに、平和条約を結ぶことの難しさである。むしろ対立の時代に、さまざまな理由から双方で譲歩が引き出しやすかったときに結んでいればと考えるのは、皮肉すぎる見方であろうか。（当センター主催のシンポジウムは8月に出版を予定している。）

(徳永昌弘)



講演するパノフ大使

モンゴルから モンゴル国の総選挙

7月2日、モンゴル国で4年に一度の国家大フラル（国会）総選挙が実施された。結果はナンバルジン・エンヘバヤル党首率いる野党人民革命党が76議席中72議席を獲得して大勝した。旧連立与党民主連合からの当選は在任中腐敗追及に意欲を見せた元首相ナランツァツァラルト氏のみ。民主連合政府の首相経験者エンヘサイハン、エルベグドルジ、アマルジャルガルの各氏や大フラル議長ゴンチグドルジ氏は軒並み落選した。総選挙委員会の発表によれば、投票率は81.37%。投票率が最高だったのはホヴド県第44選挙区の98.9%、最低は首都第54選挙区の70.2%である（オドリーン・ソニン紙7月4日）。前回1996年の選挙での首都の投票率は90%というから、四年間の民主政府への失望は、首都で顕著に現れた。有権者は与党が強調する経済改革の成果より、要人の腐

敗・不正や政治的な混乱に審判を下したのである。春の世論調査の段階で既に人民革命党の勝利は確実視されていたが、これほどの地すべりの勝利は、人民革命党自身にも予想外だったようである。新政権の首相には人民革命党党首N.エンヘバヤル氏が本命であるが、大統領N.バガバンディ氏に近いとされるSh.オトゴンビレグ氏の名も取り沙汰されている。エンフバヤル氏は42歳。人民革命党がかつての共産主義政党でないことを強調し、生活の安定に配慮した漸進的な経済改革を主張して支持を集めた。同氏はトニー・ブレア首相のファンで、イギリス・リーズ大学留学中英文学を専攻、ディケンズやウォルフ、ハクスレーの作品を翻訳した。自ら仏教徒であると語り、現在もプラトンや池田大作の著作を翻訳中とのことである。（岡 洋樹）

中国から さまざまな中国語

方言の違いは日本にもある。だが国土の広い中国のこととなると、もはや「方言」などといって済まされないほどのさまざまな中国語が国土のあちこちで話されている。特に長江（揚子江）から南の地域では、方言の多様性が著しく、広東語や上海語や福建語、客家語などなど、様々な方言があり互いにほとんど会話が不可能なほどの違いがある。

言葉の通じない状態を、広東語では「鶏同鴨講（カイトーンギャップコーン）」（ニワトリとアヒルがお話をする）と表現するが、例えば北京の人がいきなり広州の雑踏に立つと、さしずめニワトリに囲まれたアヒルの心境に陥

ることになる。

他方で、複数の方言を話せる人の「使い分け」もまた見事である。例えば、職場での仕事の会話は標準中国語、家庭内では広東語、同郷出身の運転手とは客家語というふうな、完璧に使い分ける人もいる。一般的に言って、高学歴で要職にある人ほど多種の方言を使い分ける傾向がある。コネや縁故関係の巧みな活用が物を言う中国社会において、相手に応じ状況に応じた方言の使い分けが、成功するための手段ともなるからであろう。

(瀬川昌久)

AREA REPORT



朝鮮地域から 韓国、人口統計発表

韓国統計庁はこのほど「世界および韓国の人口現況」を発表した。それに依れば2000年7月1日現在韓国人口は47,275,000人である。これは世界で第25番目。人口密度では476で世界第3位である。

うち、65歳以上のいわゆる高齢者人口を3,371,000人としている。これは全人口の7.1%に当たり、昨年の6.8%より0.3ポイント増えている。韓国も高齢化が進んでいるのである。統計庁では、高齢人口比率を2022年には14%、

2030年には19.3%と見通し、超高齢化社会を迎えるだろうと見ている。これを支える世代の16～64歳層に対する比率を見ると、現在は10人に1人であるが、2030年には10人に3人となる。

また、女性1人が出産する子供の数は、1970年は4.5人であったが、98年には1.48人まで減少している。

(成澤 勝)

日本館便り

nihonkan-dayori

4月から約3ヶ月間にわたりノヴォシビルスクの日本館に滞在して帰国した。一ヶ月以上にわたり温水が利用できずに苦勞したのを除けば、アカデムゴロドクでの生活は順調であった。この間ロシアでは新しい大統領プーチン氏の就任式が行われ、その後彼が繰り出す矢継ぎ早の政策とそれに対する国内の反応を地方から観察することができた。ペレストロイカ以降10数年の社会的、経済的混乱状況から脱却し新たな仕組みを構築しようとロシアは模索しているが、歴史を専攻している私にとっても、新たな指導者の出現とその政策はロシア国民同様大きな関心をひく問題であり、『シベリア通信』その他で現地からの情報を日本に伝えようと試みた。

強力な法治国家の構築を目差す大統領は各管区に大統領直属の総督を派遣するというプランをすぐに実行に移し、地方の首長を地方での仕事に専念させるための上院の制度改革は上下両院で承認された。外交面では中国、北朝鮮を訪問して沖縄サミットに参加したプーチン氏の発言には各国が注目した。本会議後、債務の問題

があるとはいえロシアは実質的にG8の仲間入りを果たしつつあるという意見も聞かれるなど国際舞台へのデビューを彼は無難にこなしたように思われる。またサミットの前後にアムール州と、エネルギー問題が深刻なカムチャツカ州を訪れて地方当局や住民と意見交換したことも若き大統領の行動力を示している。

国内外における彼の指導力がロシアにおける民主主義的制度のいっそうの充実や経済復興、国際社会におけるロシアの発言力の増大にいかん具体的に発揮されていくのか否かについては今後も注視していきたい。9月に大統領は訪日するが、平和条約締結に向けて日露関係がさらに発展していくことを望むものである。日露両国のトップによる関係改善の試みはもちろんであるが、地域間の交流強化も重要である。この点ノヴォシビルスク州知事が訪日し各自治体関係者と交流するプランが延期されたのは残念であり、近い将来このプランが実現することを願っている。

(寺山恭輔)

東アジア伝統文化の伝承相を比較する

東北アジア研究センター客員教授／高麗大学教授 徐 淵昊

日本も韓国も伝統文化に立脚した社会を有している。しかし、その文化の伝承の様相は異なる。特に、芸能に視点を当てて比べてみよう。

古い時代から、芸能・演芸のようなものは東西洋において存在してきた。ところが、西洋において芸様式(ars)の変化・分化が速い速度で展開していくにつれ、東西洋間では概念や形式、伝承方法等に差異が生じはじめ、それぞれの特色が顕著になってきた。19世紀中葉からおよそ一世紀のあいだ、東洋ではいわゆる「近代芸術」という意味で、西洋受容、西欧模倣、欧米追従が強行され、この過程において数千年の芸伝統の多くが傷つけられ、あるいは失われた。芸術は個性と創意性に裏付けられた新たな形態であるが、芸能は匿名的に反復される技能であり、さらに演芸は大衆的で低劣な娯楽として扱われてきた。相対的に西洋的形式を上位・上質に置く歪な認識が拡散したのもこの時期であった。1960年代以降、東西洋の交流が繁くなり、また拡大していく中で、互いに相対的な観点から価値や伝統性を認識し、あるいは尊重するようになるが、こうした文化相対主義に基づいた、人類に普遍的なものとしての芸能(performing arts)が注目されてきた。

韓日両国は悠久の歴史の中で、芸伝統を共有する部分があるという点で非常に稀な事例である。のみならず、今日東北アジアにおいて芸伝統を保存・伝承する国という点から見ても世界的に宝庫である。シルクロード文化・古東北アジア文化・中国文化のさまざま原型が韓日両国においてたびたび発見され、確認される現実に専門家たちは大いに関心を寄せている。

ところが、視角を換え、長い歴史を通じて伝承の現

場を支えつづけてきた人々に目を向けてみると、我々両国の先祖たちがそれぞれの芸能の原型を継承するために流した汗、忍苦の長い時間、あるいは彼らの高潔な精神力は、なかなか現代の人々に理解されずにいる。まさしく文化危機といわざるを得ない。東洋の芸能は楽・歌・舞・詞・伎の総合である。いずれか一つの要素が抜けても調和が損なわれる。芸能が集団的であるのはこうした理由による。集団化は自ずと父子伝承・



韓国における人形劇の伝承者たち

師弟伝承・現場伝承・状況伝承を生む。個人的な才能や技術のみならず、地域・経済・環境・状況・身分・材料等から多分に制約あるいは拘束を受けざるを得なかった。近代化の干渉から芸能集団を保護し、更には宣揚すべく、戦前日本で制定したのが無形文化財制度である。続いて、韓国及び台湾でもこの制度をほぼそのまま受容し、施行している。芸能保有者たちこそが「現代に生きる古典文化」というべきものである。もちろん、制度によって指定された芸能保有者以外にも韓日両国には数多くの芸能あるいはその集団が伝承され

てきている。昨年4月筆者は台湾国際個人芸術祭に参加し、研究発表を行った際、東西各国の人形劇を見たことがある。日本の四国地方の人形劇、台湾の布袋戯、そして韓国のコクトゥガクシ人形劇を比較しながら、特にアジアの芸能の優れたところや独創的なところをあらためて発見した。芸能集団を保全し、継承することは国家的な責務であり、また非常に困難な課業である。とりわけ韓国の場合は危機に瀕しているといわざるを得ない。それを支えるはずの民衆の関心の方向は如何ともしがたいものがあり、また政策的な善処にも限界がある。

● 最近の講演会

◆公開シンポジウム

5月13日(土)
午後2時より仙台
国際センター3階
中会議室において
公開セミナー「草
原と遊牧の国モン
ゴル」が開催され
ました。



同セミナーは、
国際協力事業団(JICA)東北支部と東北アジア研究センターの共
催によるもので、久保田眞司前モンゴル駐在大使の講演と、岡洋
樹・本センター助教授をはじめとする3人のパネリストによる報
告とパネルディスカッションが行われました。

当日は雨模様の天候にも関わらず、会場には約80人の参加者が
集まり、モンゴル紹介の講演と報告に耳を傾けていました。

セミナーは、香川敬三・JICA東北支部長代理(前駐モンゴル大
使館一等書記官)が司会をつとめ、最初に石井和男・国際協力事
業団(JICA)東北支部長の挨拶と事業の紹介、徳田昌則・東北ア
ジア研究センター長の挨拶とセンターの紹介が行われたあと、次
の講演と報告が行われました。

講演：久保田眞司・前モンゴル駐在特命全権大使

「草原と遊牧の国に使いして」

報告：岡 洋樹・東北アジア研究センター助教授

「日本とモンゴル：歴史と課題」

S. ジャルガラン・東北大学理学研究科博士課程

「“モンゴル地質鉱物資源研究所”プロジェクトとモン
ゴルの金鉱床」

後藤 仁・帯広畜産大学名誉教授

「家畜感染症診断法の改善」

報告のあと、一般からの質問・意見を受け、討議が行わ
れました。

◆学術講演会

「遣日使節レザノフの日本語辞書にみられる仙台弁」
(ボンダレンコ・天理大学教授)

6月20日、本センターの共同研究「前近代における日露交流資
料の研究」の一環として、天理大学客員教授ペトロピッチ・ボン
ダレンコ氏による講演会が開催された。

レザノフは1804年、日本との交易を求めて長崎に来航したが、そ
の船にはロシアに漂着して10年ぶりに帰国する石巻の船員4人が乗
っていた。ボンダレンコ教授は、船員津太夫らの見聞録「環海異聞」
に収められた「日露辞書」と、レザノフが彼らの協力を得て作った
「日本語辞書」を比較検討した。両辞書には、船員たちが数年にわた
って生活したシベリアのイルクーツク方言が採録されており、ロシ
ア言語学にとって貴重な史料であること、また船員の出身地である
石巻・仙台地方の言葉も収録されており、江戸時代の方言研究にも
役立つものであることが確認された。



「老子とトルストイ」(キム・レチュン教授)

2000年6月24日(土)、仙台市戦災復興記念館にてキム・レ
チュン東北アジア研究センター客員教授(筆名キム・レーホ、ロシ
ア科学アカデミー世界文学研究所首席研究員)を講師に迎えての
公開講演会が開催されました。キム教授は日-露を中心とした比較文
学の研究に長年携わってこられ、現在ロシアの世界文学研究の指
導的地位にある方です。またキム教授はロシアとアジアの比較
思想の研究にも従事してこられ、今回の講演では特にそうした視
点からロシアの文豪・思想家トルストイに関して興味深いお話を
していただきました。キム教授によれば、ロシアでは、モンゴル
支配からモスクワ公国が成立したという歴史的背景から、ロシア
文化の中にアジア的要素を見ようとする「ユーラシア主義」があ
りますが、これに対して「西欧派」と呼ばれる人々は激しく反発
します。しかし、ロシアを代表する文豪トルストイ自身が晩年にな
って、生涯において『老子』には『福音書』と並ぶ巨大な影響
を受けたことを明らかにしています。また、トルストイが初めて
『老子』を手にしたのは『戦争と平和』の完成後10年も経ってか
らのことですが、実は『戦争と平和』にもすでに深い東洋的思考
が存在し、同時代の評論家シェルグノフがそれに注目して「トル
ストイの主張するすべては私たちの習った近代思想家たちの考え
とまったく違う。誰が正しいか?オギュスト・コントかトルスト
イか?西洋か東洋か?」と問っていたのです。しかしキム教授は、
トルストイは西洋と東洋を対置するのではなく、機械文明が現代
の価値観を支配する今日において東洋の思想は根本的な意義を持
つと主張して止まないのだ、そして、そう考えるトルストイを念
頭に入れてその文学遺産を再読、再考する時が来たのではなかろ
うか、と締めくくられました。

講演は極めて熟達し
た日本語で行われ、ま
た従来のロシア文学の
理解にはなかった重大
な文明論的論点を提示
するものであっただけ
に、大学内外から参会
した多くの聴衆に深い
感銘を与えました。



「宿主・寄生者の軍拡競争における行動的防御」
(モシキン教授)

2000年6月28日(水)午後1時30分より、東北大学川北キャン
パス川北合同研究棟4階会議室において、上記の題名でM.P.モシキン
教授による講演会が開催されました。

モシキン教授はロシア科学アカデミー・シベリア支部・動物分類
生態学研究所副所長で、今年4月から7月までの4ヶ月間東北アジア
研究センターの客員教授としてセンターで共同研究を行っています。

モシキン教授はシベリアに生息するネズミ類について生理学的な
切り口からの生態学の研究を行っていますが、今回の講演では病原
菌に感染したほ乳類が神経内分泌系を介して行動や匂いなどが変化
することにより、同種他個体との接触が減少し、結果的に感染が防
御されることを、マウスやシベリアン・ハムスターを使った事例に
ついて紹介されました。更に、仙台に来てから園学部で行った特定
の遺伝子を欠損させて作ったノックアウトマウスを用いた最新の成
果についても、ビデオ画像を示しながらお話になりました。



センター動向

本年7月～9月の東北アジア研究センターの客員研究者をご紹介します。

【国内から】

- 渡邊幸治（ワタナベ, コウジ）教授：経済団体連合会特別顧問・元在ロシア連邦日本国特命全権大使、開発と社会変容の研究
- 江夏由樹（エナツ, ヨシキ）教授：一橋大学大学院経済学研究科教授、東アジア・北アジア交流論
- 横山隆三（ヨコヤマ, リュウゾウ）教授：岩手大学工学部教授、森林等の資源

【海外から】

- 徐淵昊（ソ, ヨノ）教授：韓国、高麗大学校文科大学教授、東アジアの儀礼・芸能における身体と社会の表象に関する共同研究
- MOSHKIN, Mikhail P.（モシキン, M.P.）教授：ロシア、ロシア科学アカデミーシベリア支部動物

分類・生態研究所副所長、小型哺乳類の個体群生理学

- 陳春林（チン, シュンリン）研究員：中国、廃棄物溶融炉の炉内解析に関する計算機シミュレーション
- BARINOVA, Anna A.（バリノワ, A.A.）研究員：ロシア、ロシア科学アカデミーシベリア支部細胞・遺伝学研究所研究員、東北アジア地域における淡水動物の遺伝的多様性に関する研究
- TARAN, Georgui S.（タラン, G.S.）研究員：ロシア、ロシア科学アカデミーシベリア支部中央植物園上級研究員、ノア・データを利用したオビ・イルティシ川氾濫原植物群落の分布構造の解析とデータベースの構築
- 朴慶洙（パク, ケンシュ）研究員：韓国、江陵大学校人文大学副教授、仙台藩商人資本の研究

（柳田賢二）

● 東北アジア研究センター客員教授紹介 ●

--- 徐 淵昊（ソ・ヨノ）教授 ---

7月12日から10月11日までの予定で、高麗大学の徐淵昊教授が着任した。同教授は専門が民俗演劇学であるが、その延長で演劇学全般・民俗学全般と領域は広く、特に日本と朝鮮との演劇交流（日本の新派演劇の朝鮮への伝播の問題）で1982年に学位を取得している。また、現在韓国に伝存する仮面劇に関しては網羅的に整理・研究し、5部作にして著している。また、文化の伝承という角度から民俗学にアプローチし、その方面でも実証的研究を重ね、『韓国伝承演戯の現場研究』といった著述に成果を提示している。50歳代で既に学会をリードし、目下韓国演劇学会会長・韓国民俗学会副会長の任に当たっている。

一方、こうした業績が評価され、韓国の現政権下での対日文化交流政策策定の要衝たる「韓日文化交流会議（座長池明観氏）」の事務局長を任され、日本側の「日韓文化交流会議（座長平山郁夫氏、副座長三浦朱門氏）」と共同で日韓友好のため政策提言に務めている。

本研究センターでは同教授のこうした広範な活躍に注目して、東北アジアの儀礼芸能研究方面での研究成果を確かなものとしていく一方で、21世紀東北アジアの安定と繁栄に向けた新たな日韓の役割を考える作業をともに進めていく。

（成澤 勝）

東北大学とモンゴルとの学術交流について

MONGOLIA

東北大学東北アジア研究センター教授 佐藤 源之

東北大学は国際的な研究・教育交流の円滑化のため、31カ国29機関と大学間協定、108の機関と部局間協定を締結している。本年東北アジア研究センターでは、モンゴル科学アカデミーおよびモンゴル技術大学との間にそれぞれ学術協定を締結する運びとなった。モンゴルの研究・教育機関を対象とした学術協定は東北大学では初めてのケースである。両協定には教官・研究者の交流、学生交換、学術資料・刊行物の交換、共同研究、国際研究会議、セミナー、シンポジウムの推進等が織り込まれる。

両組織との交流は各教官の研究を通じて行われてきた他、1998年東北アジア研究センター長（当時）吉田教授らがモンゴル国立科学アカデミー並びにモンゴル技術大学を訪問した。一方1999年にはモンゴル国立科学アカデミー総裁チャドラー博士、モンゴル技術大学バダルチ学長が東北アジア研究センターの招きで来仙し、東北大学阿部博之総長と会見、本センター主催の学術講演会で講演した。

モンゴル国立科学アカデミーとは本センターならびに理学研究科の共同研究が母体となって大学間学術交流協定が締結される。同アカデミーは1921年典籍委員会に始まり1961年国立科学アカデミーとなった。言語学・歴史・自然科学・医学・農牧業の5研究所で発足したが現在18の研究所・研究センターより成る。更に教育機関としてウランバートル大学を持つ。1997年、モンゴル国立科学アカデミー歴史研究所所長アユンダイ・オチル教授が東北アジア研究センター客員教授として招聘された。歴史研究所とは本センター岡助教授を中心とした共同研究が盛んである。また1997年理学研究科生物学専攻ではモンゴル草原植物群集の生産構造に及ぼす気候と遊牧の影響について同アカデミー生物学研究所と研究を開始し、1999年モンゴル国内3地点



ウランバートル市内で行った地中レーダ測定を興味深げに覗きにきた子供たち

に実験調査区を設置、調査を開始した。

一方、東北アジア研究センターはモンゴル技術大学・ジオサイエンスセンターと部局間の学術交流協定を締結する。モンゴル技術大学はモンゴル国立大学の工学系学部が1990年に独立してできたモンゴルにおける最も有力な工学系大学である。16の学部、学生数約9000人を擁する。ジオサイエンスセンターは2000年2月に発足、鉱山工学科ゲレル教授がセンター長を務めており鉱山、地下水理、環境、地下探査等の研究・教育と国際共同研究等を中心とした活動をめざしている。ゲレル教授は1998年に東北アジア研究センター客員教授として本センターに滞在した他、本学教官のモンゴルでの地質調査に協力いただいている。また1999年本センター佐藤教授らはウランバートル周辺において地中レーダによる地下水理計測をモンゴル技術大学の協力を得て実施している。

本センター教官を中心とするモンゴル研究、共同研究ならびに学術交流が両協定の締結により、更に活発に行われることが期待される。



朝鮮半島では歴史的な南北首脳会談が実現し、世界は劇的な場面を見せつけられた。その評価は即断はできないが、少なくともその舞台は南北だけの独壇場にはならず、米中に加え、ロシアの役割が重要になったのは歴然としていた。日本を含めた東北アジア地域は、やはり二国間関係で議論されることは不可能で、その安定・繁栄のためには関連諸国の多チャンネルの話し合いや交流が不可欠であると見なければなるまい。 (成澤 勝)

《うしとら》（東北アジア学術交流懇話会ニューズレター）第6号 2000年8月10日発行
発行 東北アジア学術交流懇話会 編集 東北アジア学術交流懇話会ニューズレター編集委員会
〒980-8576 宮城県仙台市青葉区川内 東北大学東北アジア研究センター気付
PHONE 022-217-6084 FAX 022-217-6010
<http://www.cneas.tohoku.ac.jp/gon2/> E-mail :iwayama@cneas.tohoku.ac.jp